

生協のネットワークを生かした支援の取り組み

南三陸町の子どもたちを 京都に招待!

京都生協

京都生協は、8月17～21日の日程で、宮城県南三陸町の中学生26人を京都に招く企画「海の虹プロジェクト」を行ないました。子どもたちは、市内観光に加え、沢登りや京野菜の収穫といった自然と触れ合える体験などをふんだんに盛り込んだ企画を楽しみました。

「海の虹プロジェクト」に込められた思い

京都生協は、震災直後の「被災地生協に代わって産直生産者の支援を」という日本生協連からの呼び掛けに、いち早く活動を始めた生協の一つです。それ以来、津波で甚大な被害を受けた宮城県南三陸町の生産者支援として、カキ養殖の資材作りや炊き出しなどを継続して行なってきました。

被災された方の多くが移り住む登米市の仮設住宅でもその活躍は知られ、被災地との信頼関係はこの1年間で確たるものになっています。今回の企画のきっかけは、登米市のNPO団体「海の虹」から、「離れ離れになった子どもたちに、一緒に過ごす夏休みの思い出をつくってあげたい」と相談を受けたことでした。

多くの力が集結

京都生協職員のボランティア活動には、これまで同生協の産直生産者や取引先の方々が参加したほか、遠征費用を捻出する即売会を職員や組合員が開くなど、多くの人が支えてきました。今回、南三陸町の子どもたちが京都に来ることが発表されると、交通手段や宿の確保、食材の手配、食事の準備協力など、たくさんの人が名乗り出ました。企画前日の説明会から足掛け6日間、生協組合員・職員をはじめボランティアに関わった人は延べ百数十人に上ります。

子どもたちを送り出す南三陸町でも、多くの方が



地元の方の手ほどきを受けながら、舞鶴市発祥の京野菜である「万願寺とうがらし」を収穫。

力を貸してくれました。みやぎ生協ボランティアセンターの須藤敏子さんが開催を告知すると、宮城県漁協の佐々木憲雄さんは教育委員会に掛け合い、登米市の仮設住宅に住む松岡良奈さんは1軒1軒呼び掛けに回りました。地元FM局も何度も告知をしてくれました。

子どもたちの心に残ったもの

この企画では地元の方と触れ合う機会も多く設けられました。滞在4日目に訪れた延命寺（京丹後市弥栄町）では、地区の消防団副団長である羽賀義昌さんが案内役を務めてくれました。羽賀さんは、樹齢400年の椎の木を指して、「激しい風雨や丹後の厳しい雪に耐えてきたからこそ、これだけ強く立派な木になった。自分たちの村は時代の流れの中でじわじわと小さくなってしまったけど、地元が好きで、ここで生きていきたいという思いは、南三陸のみんなと同じです」と話し、子どもたちは聞き入っていました。

この企画を通して、26人の中学生は、「自分たちを応援してくれる人がこんなにいるんだ」と気付き、京都の人びととのつながりを感じているようでした。最初は口数が少なかった子どもたちも、企画終盤にもなると、「イメージしていた京都と違って、びっくりした」「とても暑かったけど川は楽しかったし、良いところがたくさんあった」「自分たちの学校も生徒が減って大変。町の復興のために何かしたい」と、口々に自分の思いを話していました。



延命寺の椎の木の前で、記念の1枚。今回のツアーには、「この木のよう、強くたくましく、成長して欲しい」との思いが込められています。